慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

	. •
Title	池田清著 政治家の未来像 : ジョセフ・チェムバレンとケア・ハーディ
Sub Title	The political visions of the British statesmen, Joseph Chamberlain and Keir Hardie, 1962, by
	Kiyoshi Ikeda
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.1 (1963. 1) ,p.80(80)- 84(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19630101-0080
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630101-0080
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-1963010 0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

池田清著

『政治家の未来像

--ジョセフ・チェムバレンとケア・ハーディ

飯田

とにしよう。つぎのような内容から成っている。この書の全般的な評価に入る前に、その内容について考察するこ

第三節アイルランド自治法案と自由党の分裂、第三章帝国の発展、二章再建の構想とその挫折、第一節その背景、第二節非公認綱領、節ジョセフ・チェムバレンとバーミンガム、第二節新急進主義、第一ジョセフ・チェムバレンの新急進主義、第一章新急進主義、第一

動の発生、第三節独立労働党、結び。第二節独立労働主義、第一節社会主義思想の復活、第二節新組合運第二章独立労働主義、第一節社会主義思想の復活、第二節自由労働主義、労働者、第一節ケア・ハーディの独立労働主義、第一章ヴィクトリア時代の第一節農村の没落、第二節労働運動の新局面、第三節帝国の発展、第一節農村の没落、第二節労働運動の新局面、第三節帝国の発展、

等教育改革の問題は、イギリス国教派による初等普通教育の壟断に 成し、その近代化を計ったことの三つをあげている 経済的問題を克明に分析しているのは興味深い。著者はバーミンガ られた労働者階級の政治的登場に照応させて、自由党の組織を再編 の市政改革を推進したこと。()一八六七年以降新たに選挙権を与え と。仰近代的産業都市としてのバーミンガムの発展に即して、諸々 Education Act) をめぐって、非国教派の反国教会闘争を指導したこ においてチェムバレンを生み出したバーミンガム市における政治的 結びついていることを知るのである。その意味では著者が、第一章 しめた業績として、(1)一八七〇年の初等普通教育法 (The Elementary ム市におけるチェムバレンをして、新急進主義の有力な指導者たら 紀末期のイギリス政治構造によって規定され、産業の発展と密接に ものではなく、新急進主義から帝国主義への傾斜の過程も、 ジョセフ・チェム バレンといえば、 しかし本書を読んでみると、彼の思想的立場はそんな単純な イギリス帝国主義の推進者であったことを想いうかべるであ 公立の学校による無宗派・義務・授業料免除制国民教育の ズ(Cecil Rhodes)とともに南アフリカに侵略戦争をひきお われわれは、直ちに、 九世

主義擁護の立場をより鮮明に打ち出すことの裡に求めさせたのであ 派の陣営に属していたことは、彼をして大衆馴致の方策を、非国教 った」(一五頁)。 イギリス社会の小市民層や労働者階級の大多数が、 てかれらを直接雇傭する立場にあり、したがって、 めの一手段でもあったのである。思うに、彼は多年工場経営者とし 民層や労働者階級を馴致し、かれらを既成の政治枠に秩序づけるた 願望をより深く理解していたからに他ならない。 国民教育は、多くの欲求不満を内部に鬱積させているこれらの小市 者はこの点について、つぎのようにいう。「チェムバレンにとって 有するものであり、ここに新急進主義と呼ばれる理由も存する。 とによって、保守的・地主的支配に対抗しようとする挑戦的性格を む広はんな階級的地盤を獲得し、自己の陣営を補強・再編成するこ 九世紀七〇年代の急進主義は、労働者階級や中小市民階級をもふく らしめるものがある。 十九世紀前半の急進主義 (=ベンサム主義) を含むものであって、 に獲得した勤労大衆の票を自由党の方向によりもどさんとする意図 権をあたえられた都市の労働者階級および小市民階級を自己の陣営 にひきつけることを通じて、ディスレーリ 確立を通じて、土地貴族階級の社会的政治的権力に打撃をあたえよ 勃興する産業資本家階級のイデオロギーであったとすれば、 内閣による一八六七年の第二次選挙法改正によって選挙 (一二頁)、同時にそれは、すでに保守党のディ いわゆる新急進派としての彼の面目を躍如た ーがかって保守党のため しか 伝統的に非国教 かれらの欲求や 十九世紀 著

> 人々にあたえた影響は注目すべきである。 大々にあたえた影響は注目すべきである。 が、「都市社会主義」であることを指摘しつつ(二一頁)、「大窓登益者化政策を槓杆として大衆の馴致・体制化、さらに組織化を衆受益者化政策を槓杆として大衆の馴致・体制化、さらに組織化を衆受益者化政策を槓杆として大衆の馴致・体制化、さらに組織化を、著者は、人々にあたえた影響は注目すべきである。

が、グラッドストンの支配する自由党の内部での、この政策をおし すすめようとする彼の特異な立場について、著者は第一章において ギリス国教会の廃止、何は公立の学校における授業料免除制である 土地問題の解決、目はウェールズおよびスコットランドにおけるイ による農業労働者の選挙権の獲得、口はアイルランド問題をふくむ は一八七一年の労働組合法の改正や一八八四年の第三次選挙法改正 新急進主義としての活動の脊椎をなすものであった。すなわち、 Land)、 🗎 「フリ 治勢力として抬頭してきた労働者階級を参加させ、この両勢力の同 が(三五頁)、この四つのフリーダムは、その後のチェムバレンの 盟の上に彼の新急進主義の基盤を求め、そのための政策として、 ル」(Free School) の「四F」政策をその公約として掲げるのである 「フリー・レーパー」(Free Labour)、〇「フリ 成であるが、それは、「一つの政治勢力としてはすでに老朽化しつ つある中産階級非国教派の陣営に、第二次選挙法改正以降新しい政 つぎに自由党の再組織のための運動としての自由党全国連盟の結 ・チャーチ」(Free Church)、図「フリー・スクー ・ランド」(Free (--)

克明に追求している。

更更 Cocercion)の政策をとり、その抵抗を緩和しようとした (五八十六 民が一八七九年アイルランド土地同盟に結集し、これが民族独立運 政府がとった農民にたいするきびしい弾圧政策にたいして、チェム 動と結びつくことによってはげしくなるにつれて、グラッドストン たかが明らかにされている。 すなわちアイルランド問題に おいて 題の解決のためにとらざるをえなかった諸方策が展開され、そのな グラッドストン内閣がその従来までの自由放任政策、植民地無用論 は、一八七三年恐慌以後、窮乏におとしいれられたアイルランド農 かで、チェムバレンを中心とする新急進派はどのような態度をとっ れにともなう国内における社会経済的危機の時期において、第二次 とするイギリス資本主義の世界市場における独占的地位の崩壊とこ を基調とする平和外交政策に代って、 レンは、 第二章再建の構想とその挫折においては、一八七三年恐慌を契機 新急進派として「弾圧よりも先づ改革」((Reform before 積極的な植民地対策、 国内問

クリュー製造会社」の経営者としての資本家的理性によって要請されば、彼の対外強硬論は、バーミンガムの「ネットルフォード・スリーの保守党に伝統的な帝国讃美論にも批判的であって、著者によけっの保守党に伝統的な帝国讃美論にも批判的であって、著者によデンやジョン・プライト等のマンチェスター 学派(=旧急進派)にデンやジョン・プライト等のマンチェスター 学派(=旧急進派)にデンやジョン・プライト等のマンチェスター 学派(=旧急進派)に

り、これこそ彼の外交政策の基調となったものである。 業資本の重要な販売市場としての価値にたいする認識があるのであ植民地重視論の背後には、バーミンガムを中心とするイギリス鉄工れたものであるというのである (六六頁)。すなわちチェムバレンの

(5)

対立し、党を分裂させることも憚らなかった。この過程の分析は非 常に詳細で、 関心を示すのであるが、ひとたびアイルランドが、イギリス王国に 落するという危険が感じられるに至っては、党首グラッドストンと 政治的危機をもたらし、もしくはイギリス資本主義の市場圏から脱 会主義的ポーズをとり、またアイルランド農民への同情と自治への 社会主義の攻撃の排除を基軸として展開され、その限りにおいて社 ける地方自治の改革を目指す自治的集産主義、小農民の創出による している。 ことになった(八三頁)。このように、彼の新急進主義は、国内にお 牙城としてのトーリー党と自由党内ホィッグ派の不安を激化させる 会政策としての小農民の設置などであるが、これは土地貴族階級の る農業労働者階級への選挙権の拡張、農業労働者階級にたいする社 ける改革と無縁ではありえず、一八八四年の第三次選挙法改正によ ところでチェムバレンのこのような対外政策は、当然、国内にお 自由党の交叉的分裂の経緯を、ヴィヴィッドに描き出

発展と社会主義勢力の増大、資本主義の独占的段階への突入にとも落と階層分解、農民の窮乏化、一八八〇年代における新組合運動の主義者に転化せしめたところのさまざまな要因、すなわち農村の没第三章帝国の発展においては、チェムバレンをして本格的な帝国

ついて、著者のいうことを簡単にみてみよう。 なう列強の帝国主義政策の矛盾の激化などについて、彼の政策とのなったイギリス産業の世界市場における独占的支配を阻止しようとする経済的要請によって特徴づけられ、その故にしばしば「新重をする経済的要請によって特徴づけられ、その故にしばしば「新重をする経済的要請によって特徴づけられ、その故にしばしば「新重度」と呼ばれることを指摘する(一六一頁)。要するに著者は、チェムバレンをもって、急進的社会改革論者から帝国主義への変貌関連において有機的にとらえられている。著者はチェムバレンの英関連において、後の政策とのであるが、つぎにわれわれは、ケア・ハーディの独立労働主義にのであるが、つぎにわれわれは、ケア・ハーディの独立労働主義にのであるが、つぎにわれわれは、ケア・ハーディの独立労働主義について、著者のいうことを簡単にみてみよう。

として、 民主連盟やフェビアン協会などとの関係、 しているとき、一八八〇年代、イギリスの独占的地位の崩壊を契機 時代にからませて語っており、興味深く読ませる。そしてさらに、 働者の状態、とくに炭坑労働者のみじめな状態を、ハーディの幼少年 はそうした視角から、ハーディを生むに至ったスコットランドの労 杉 ングランドではなく、 ケア・ハーディの独立労働党の成立を考える場合、その本拠がイ ハーディによって独立労働党が結成されるまでの模様を詳細に 目的と綱領、 社会主義運動が勃興し、新組合運動がたかまってくるなか その運動がおこったことは注目されねばならないが、著者 合の指導者が、自由党の政策に追従し、日利見主義に堕 組織などの特徴的な点や、労働組合会議、社会 スコットランドの、しかも炭坑労働者の間に その矛盾および競争関係

こととする。紹介する余裕がない。そこで以下に、筆者の卒直な批判を展開するなどについてふれている。残念ながら、筆者は、これ以上くわしく

はなかろうか。 らわすような題名をつけるのが、読者にたいして親切というもので 題名をつけようとしたのではないにしても、一見してその内容をあ 見出すというように考えはしないだろうか。ことさらに紛らわしい 的であり、ロマンティックな題名ではあるけれども、 ったかというひとつの歴史的事実を正しく評価しようとする努力とらのそれぞれの未来において、いかに実現し、もしくは挫折してい らのそれぞれの未来において、いかに実現し、もしくは挫折してい人が若き日に胸に懐きつつあったポリティカル・ヴィジョンが、彼 環境との中でいかに屈折しつつ実現ないしは挫折していくかが共通 が って、この二人のなかに、将来ありりべき政治家の「二つの型」を の問題意識となっている」とのべているが、これによれば、この二 を浮彫りすることに力点がおかれ、この未来への政治構想が時代と の一つのアプロ いうように理解される。とすれば未来像という表現は、 筆者は「序」 「政治家の未来像」 というこの書の題名の意味がよくわからな この種の業績の不足しているなかで、その果す役割は 大き イギリス政治史にかんするすぐれたモノグラフであ ーチである。そしてこの場合特に、政治家の未来像 のなかで、『第二に両論文ともに 人はこれによ 非常に文学

党対労働党の二大政党の対立は、自由党の長期にわたる自己解消のつぎに著者は、この二つの論文に関連づけるものとして、「保守

の相異を、 近い情熱をもって「反体制運動」を指導した。両者はまさに「先駆義体制の補強を試みた。同じ背景の下に、ケア・ハーディは信仰に 者を同一の次元において把握しているのであるが、いうまでもなく 者」であったといえよう』として、体制・反体制という視点から両 かったろうか。なるほど著者は、『イギリス資本主義の変容という 味においてあきらかに対照的であった点こそ、問題にすべきではな 戦的立場と社会主義を擁護した熱烈な平和主義者であったという意 リカにおける侵略戦争の張本人であり、帝国主義者であり、他方は **十九世紀末を背景にして、先見者ジョセフ・チェムバレンは資本主** ムパレンとハーディを関連づけるためには、何よりも一方は南アフ 過程のうちにもたらされた」としているが、本書の主題をなすチェ ギリスの社会主義者のなかで、もっとも徹底的にこれと闘い、反 もっとも具体的にあらわすものであり、まさにこの点 帝国主義の推進対帝国主義反対という二人の思想的立場

> きわだった対照をなして、生き生きとしてわれわれにせまってくる 役割、ハーディの社会主義運動における卓越した個性が、はじめて とき、チェムベレンのイギリス帝国主義史上における無視しがたい のではなかろうか。 こうした認識の上に立って、十九世紀後半のイギリス政治史をみる こそ強調されなければならない。その意味では、この研究 のライ ・モティー フはあくまでも帝国主義でなければならないと思う。

る。(有斐閣・昭和三七年八月刊・A5・二七六頁・九〇〇円) 専攻する者として、著者の今後の御研究の発展を期待するものであ ったが、チェムバレンについての著者の研究には大いに啓発された ついては、紙面の関係でほとんど著者のいうところを紹介せずに終 試みた。著者の御寛恕を祈るものである。とくにケア・ハーディに し、学界に裨益するところ非常に大きいと考える。関連した分野を 筆者は経済学を研究する者の立場から、きわめて無躾けな批判を

新 刊 紹

九尾直美 原 豊共著

『現代経済政策の理論

成長・安定・平等

の著書としては詳細な分析であるが、この経済理論の解明と吟味を行う。それは政策論 うつ り挙げる。それは厚生経済学の発展を考慮し 支配的な目的として、 価値目標の形成過程を論ずる。ついで現代の的な政策目的設定の客観性を究明し、統一的 一つの重要な面として成長・安定・平等を取 においては政策論にとって最も重要かつ基礎 おいて特色をもつと考えられる。まず第一章 における制度的、発展段階的考慮をなす点に 論の政策的適用を試みるとともに、その適用 問題を取扱っており、とりわけ現代の経済理 見られてあるが、経済政策に関する基本的諸最近作であるが、経済政策に関する基本的諸 いでこの成長・安定・平等に関して従来の いで労作を発表している経済政策ト いわゆる「福祉国家」の建設を考え、その ピグーの掲げるところのものである。 書は近時そのタフな活動力をもって相 また著者自身の目的と

> ている。 どう考えるかということである。 定性の理論は本書の著者の考えるように現実 る。より一般的には近代理論の論理的性質を の資本主義の不安定性を主張するようなそう 主要な論点があるとともにまた問題点も存し に結びつけるのであり、ここに本書の一つの理論的主張であるが、その主張を政策の方向 整作用による均衡の安定性の主張は文字通り 周知のハロッド、 資本係数による調整機構を主張するものはオ いう意味をもつものであるのかという点であ の議論に対して、右のカルドアやソローの調 リゴポリー 主義的であり、またスワン、 整機構を説くものは政策の方向としては自由 の分配率を媒介とする貯蓄率の変動による調を結びつけよ うと する。たとえばカルドア 分析を通じてそれぞれの理論に「政策の方向」 すなわち根本的にはハロッド 経済を指向するとなすのである。 ドーマーの均衡の不安定性 ソローのように の不安

同感を もつものである。(東洋経済新報社・うな考慮の必要性については筆者も大局的に 等を達成すべき政策を指摘している。 に分配率、資本係数、利潤率などの変化を考慮 してロストウ的段階説の考察を行い し、それぞれに応じて経済の成長・安定・平 いろな発展段階を区別してゆかねばならぬと つぎに政策の適用を考えるとき経済のいろ 資料的 このよ

> A5・二五六頁・八八〇円〉 - 富 田 重 夫丨

鯖田豊之著

『封建支配の成立と 落共同体』

なければならない。 ましく申上げる資格のないことは重々心得て門外漢である。従って本書を取上げ、批判が 直な疑問を提示してみた。非礼はお許し願 ただいた。 らが本書においてどう再構成されているかと いる。以下では単に読後感ということで、 いう興味も手伝って、 かつて大雑把に限を通したことがあり、 著者が立論の根拠とした二著について私も 中世初期について私はまったくの 刊行早 々一読させて

でおり、従って増大する人口に限られた土地 可能な土地がこの段階では依然として限られ を関してである。これには承服できない。村 に関してである。これには承服できない。村 に関してである。これには承服できない。村 られる如く、この時期には旺盛な植民活動がでどう対処するかは重要な問題であった。知 第一には、村落共同体の形成が封建支配 しかし低能率な土地への入植であっ